



今年の蔬菜の好評品種

何をどう 作つたらよいか

中原 忠 夫

昨年は近来稀に見る冷涼な天候に災されて、蔬菜類も水稲などと同じく不作で病虫害の多発に悩まされた。とくに果菜は府県の主産地が晩霜の害で、移入ものも高値でトマトが八月中旬すぎころでも貫三百円以上の値段がした。このような年はめつたにあるものでなく、蔬菜の価格は出廻りの量によつて変動が激しいから、今年の計画に當つて何をどう作るかはなかなかむずかしい問題である。

さて計画に當つて常に考慮に入れなければならないことは、

一 品質収量のみにとられず、北方系適品種の配合は必ず考へること。

昨年度品種間に依つて収量に相当な差があつたことは先月号に書いたが、昨年のようなことはなくとも果菜類はとくに苗床期の寒冷、定植期の晩霜低温、夏の早燥にしばしば遭うので比較的無難な早生系を考へる必要がある。

一 早出し必ずしも有利とはいへない場合が多く端境をねらつた方が有利である。最近輸送力の向上によつて早出しにつとめても府県の移入もののために育苗費の出

ない場合が多く、移入もの地ももの境に出荷すると有利な場合が多い。

一 市場の傾向を考慮に入れること。

纏つた市場のないところで消費の実態はなかなかつかめないが消費者の嗜好は年々變つていて例えば、南瓜の代用食などは殆どかえりみられなくなり、味のみでなく店頭にならべられた形や色揃までが、売行に影響を及ぼしているということである。

一 経営内容、技術を考慮に入れて品種を選択しなければならぬ。

そこで今年はどういう種類品種を選ぶかについて最近の評判種を中心に取上げて見ることとする。

果菜類

茄子 昨年は晚い品種の成績は良くなくかつたが、昨年のような天候異変はなくとも中生種のみを作るのは得策でない。もちろん早生の民田や蔓細のみを作つたのでは品質も悪く、絶対的収量が少いので早生種、中生種の適切な組合せ作付がこれから是非とも必要である。

比較的肥沃で乾燥に失しないところでは

極早生の民田がよく嗜好の面からもまたかなり人気がある。本年始めて弊社で売り出した雪印改良一號は乾燥地にもよく作られ、樹勢は強い方ではないが色沢よく、品質は民田よりよい。極早生で耐暑性も民田より強いので、一般家庭用はもちろん専業家も見逃し得ない品種であると思う。なお道立農試における試作結果についても好評を得ている。

蔓真、**橘真**などの一代雜種が好評を得て来て、昨年はかなり府県の組合せ品種が作られたが、道内で始めて作られた、雪印交配一號、雪印交配二號は民田、蔓細に引續いて出荷できる早生豊産種で、皆様の御批判を期待したい。

前に述べた組合せ作付のことであるが民田など極早生種の夏バテを心配する人は、橘真などと交互に密植して七月〜八月初旬の値の高い間だけ収穫して民田を抜取つて中生種を大きく育てるのも面白いと考えられる。

トマト 樹勢の強い晚生種を作つても北海道では六段も七段も収穫をあげることではできないから早生種がやはり有利である。

セルフトップピン(心づまり)型の品種を使つて二〜三段の果房をつけ摘心する早熟栽培も行われているようであるが、さほど成熟も早くなく、バイラスが多発して思われない。最近福壽二號が圧倒的に好評で栽培は伸びている。福壽二號は早生で品質もよいが、肥沃な深い土質を除いて成績がよくなくむしろ金成、ニューピンク、赤の最新種クイン、グローザンダローブは作りやすい。昨年の北海道園芸会の品評会では

金成種が入賞点数の大部分を占めていた。キウリ 加賀青長節成が一番多く作られていて、早出しのため大苗定植が行われているが育苗操作も無難な品種である。最近相模半白の声をほつぽつきくが市場にはまだ反響はないようである。併し品質がよいのでふえて来るのではないかと考えられる。

秋の漬物時期には直播胡瓜の早生三尺、立秋など忘れられない品種であるが、最近ベトの多発で相当計画的に薬剤散布(ボルドウ)を行わないといふ結果は望めない。昨年は低温のため炭疽病が多かつたが、これはダイセンの撒布により完全に防げるものである。

西瓜 最近いろいろな品種が紹介されているが高温を要する作物なので絶対的早生品種はない。一代雜種の草勢の強い耐病性をいかし、接木、ビニール利用のトンネル栽培などの技術を併用して作るよりほかによい方法がない。都系の一代雜種が作りやすいように思われる。

かぼちゃ まず何といつても品質本位に品種を選択しなければならぬ。八月中旬の早期出荷には成金(中村早生)以外に良種は見当らないが味のよい品種がほしいものである。秋出しは今般農林省の種苗名称登録に決定した節成デリシヤスが揃いといひ、味といい、手頃の大きさといひ好評を得ている。さらに最近バターカップという品種が喜んで作られるようになった。この品種は尻の部分に淡色の突起のある特有な形をしたもので、おそらく味の点では現在の南瓜中第一であろう。

葉菜類

かんらん 札幌でも甘藍は一年中店頭に並ぶようになつた。生産量が多いのか、消費量がむしろ減つて来ているのか、価格は低調のようである。極早生種は育苗費の割に高価に捌けないもの一つで、果菜の前作として多少取入れる程度のものであらう。ゴールドエンカー・八四は結球整一で極早生種として成績が良い。テトマーシユは極早生種とコペンハーゲンマーケットの中間に出せるので面白い。さらに早生三貫目をコペンの終りごろより十分肥大して出す方法も行われ、比較的目方もきくので有利とされている。エンクイゼン・オブ・グロリーはこの時期に作つて成績が良い。秋甘藍は近年生産地が根瘤菌の被害が多くなり、さらに生育期間の関係からだんだん都市附近より遠ざかつているが、価格はそう高価を望めないから品質の向上とコストの低下を図らねばならない。そのためには札幌大球甘藍の良種を求め、播種期を良く考えないと早期結球の失敗を来すことがある。冬季貯蔵して春出しを行うにはバンダゴリーよりもえ大丸甘藍が好評を得ている。

ほうれんそう ノーベル種よりキングオブデンマーク種に近いバイキング種の好評は年とともに高まり、専業家はもちろん家庭園でも絶対作りやすい品種として賞讃されている。ほうれんそうは甘藍のように貯蔵がきかず、鮮度の高いものが喜ばれる関係上単一種ではもちろんいけない。早春出しから秋出しまでいろいろ出荷期を考えて品種を選択しなければならぬ。生育の早

いのはミンスターランドで臺立ちも早い。ミンスターランドは秋播として好適するものであるが、耐暑性もあるので八月播にも使える。ミンスターの越年ものについて出せるのがホーランドア、ピロフレードで生育も割に早く、果菜の前作としても十分間に合う。六月から盛夏にかけての出荷は前記のバイキングがよく、単作するとキングオブデンマークより耐暑性は劣るが生育は早く、キングのように葉が展がらないから間作にも適する。

ねぎ ねぎは生育期間長く多肥を要するものであるが、十字科や果菜の作付が多くなる専業地帯では病虫害の点からも輪作に取入れてよいものと考えられる。葱の土寄について最近の研究ではそうたびたび行わない方が収量多く、品質も向上するといわれ、せいぜい二回くらいに分けて行えば足るのでその間、ほうれんそうなどを間作してもよい。一年葱としては三俣、石倉一本太が好評で肥りも早く分蘖少く品質もよい。これらの品種は越年させるも冬枯れするので、晩秋の寒さにはいたみやすいが翌春再生の早い一年成功葱が初夏出しとして好適である。

根菜類

春播大根 春大根の臺立は採種母本の選抜いかんによつて相当差を認められるが、大体稚苗期の低温の影響を受けることが原因で、現在の時無大根は特別の早播以外には問題がなくなつた。最近四倍體美濃早生大根が出現するに及んで美濃早生系の春播が旺んになつて来た。四倍體美濃でさえ札幌近郊の抽臺限界が六月十五日ごろといわ

れているのに系統の悪い美濃を競つて早播して失敗しているようである。弊社の不抽臺美濃早生大根は多年にわたつて選抜改良されたもので他の系統に較べて優秀であるが、極端な早播は多少の抽臺を見こすと六月初旬から播種できる。

にんじん 短形種の五寸などに葉枯病の被害がふえて来て札幌近郊の主産地である月寒なども、太りが悪く形がくずれ色も出なくなり困つている。さらに問題になることは輸入種で抽臺淘汰が行われてないから年によつて不抽臺が見られる。紅芯五寸にんじん(レッドコーアチャネー)を早期播種することによりことにいちじるしい。早出しと八月の内地出荷には早生五寸、紅芯五寸をどうしても作らねばならないが、秋ものには葉枯病にも強い大型五寸、紅芯總太七寸人蔘が収量も多いので有利である。

西洋野菜類

蔬菜の生産が多く過剩的傾向になり生産の穴が少くなつて来た昨今、洋菜に着目して作付する人が多くなつて来た。洋菜類は外国人の来訪も多くなり、生活程度の向上からいちじるしく需要も増しているが、他の野菜に比して消費量に限度があるからよく市場の状況を研究して作付しなければ一般蔬菜より危険なものである。洋菜中主なものはちしや、セルリー、花ヤサイでピーマンも忘れることのできな種類である。これらのものは需要の関係から特殊扱いされるから品質のよい優良なものを清浄栽培(下肥を一切使用しないで作ること)によつて生産しなければならぬ。

ちしや 春出には生育の早い半結球のウエアヘッド、メイキングでもよいが、結球種が品質もよく需要も多いものであるから、春出し以外は結球種を作るべきで、品種としてはニューヨーク系のニューヨーク十二號、グレートレークが主に栽培される。一般にちしやは酸性土壌を忌むから堆肥や石灰を予め十分施すがよい。

セルリー ちしや、花ヤサイほど需要が一般化されていないが、市場の状況を研究しながら優秀なものを出せば洋菜中最も有利なものである。従来ホワイトブルム、ゴールドデンセルフ、プランテングの早生種が主に作られて来たが、中生種のユタが株も大きくなり、莖は厚くて丸味を帯び品質も最上なので好評を受けている。

花ヤサイ 最も滋養のある高級蔬菜でさほど栽培はむずかしくないが、盛夏の候は病虫害多く蕾の發育も悪いので、極早生のアーリースノーポール種を使うとよい。

ピーマン(西洋とうがらし) 大顆が喜ばれるがカリフォルニア・ワンダーなどは着果が少ないのでハリスジャイアントのような早生種が有利である。

以上好評種を拾いあげて見たのであるが、さて何を上げるかといふことはなかなかむずかしい問題である。たといある品種がある時期に出荷することが有利とわかつても、十分その品種の特性を把握して計画の中に生かすようにしなければよい結果は得られない。ともかくうまい穴はそうあるものでないから、肥培管理に努め病虫害の防除を徹底的に行つて優秀な品物を生産することが第一である。

(筆者は雪印種苗・藤の選育種場在勤)